

2026.9

秋冬

No.123

思文閣出版

鴨東通信



❖ 日常語のなかの歴史 36
ふうりゅう【風流】

◆ 石橋健太郎

❖ てーたいむ

『神像の研究』三部作の完結によせて

◆ 伊東史朗

奇蹟の心性史

―『ヤヌス學大全』の出版によせて

◆ 西野嘉章

音曲の近代史を試す

◆ 細川周平

宮座文書の過去・現在・未来

◆ 渡部圭一

画像史料はネットオークションが頼り

◆ 中川理

❖ ミレニアル世代の研究レシビ10

小栗忠順の貨幣政策論

◆ 福田真人

❖ 史料探訪 83

TANGOTEXTILE

―藤布で創る丹後的スタイル

◆ 青江智洋

伊東史朗著

神像の研究Ⅲ

9月刊行

B5判上製・三六三頁／
定価 一三、二〇〇円

神像の歴史を振り返ると、神仏習合現象がその成立に大きくかわつており、次いで中世に盛んになる本地垂迹説は、神・仏を同一視することにより、その複合的形体を生み出してきた。これまでの神像史研究において、記紀神話の神々や祖先神・地域神のみならず、奈良時代からの修験道・陰陽道の神々についても言及されてきたが、それらは区別されずに一括して同じ神像として扱われてきた。

そのような現状に鑑み、本書では神仏習合・本地垂迹説による神像と、修験道・陰陽道の神像との差を明確にすべく、別々の部を設けて、わが国の神像史をひもとく。そのほかに、重要作品についての各個研究、および神像の周辺領域である動物彫刻、仮面、古神宝にもそれぞれ一部を与え、『神像の研究』三部作の完結とする。



【目次】

- I 各個研究
1 松尾大社の神像 —— 秦氏の祖神と外来神
- 2 八幡三神像と行教 —— 大安寺八幡宮、薬師寺八幡宮、御調八幡宮 ——
修験道、陰陽道の神像
- II 金剛蔵王と蔵王権現（重録）
3 神童寺の修験関係遺像
4 立山明神から立山権現へ —— 立山帝釈天権現の成立 ——
5 銅造日光三所権現像について
6 大將軍八神社の陰陽道神像
7 馬場南遺跡（神雄寺跡）の性格
8 十世紀の神像・肖像
9 本地垂迹思想と造像
III 10 宮寺の形成と本地垂迹思想
11 石清水八幡宮下院極楽寺伝来の阿弥陀如来像

13 12 長安寺太郎天像と観想
大神神社の大黒天像 —— オホモノヌシ命、大國主命、大黒天 ——

15 14 “宇賀弁才天”と江島

市比賣神社の幼児を抱く女神像

動物表現

16 美術史資料としての動物彫刻

17 香川・水主神社の人面師子（二対）、師子狛犬（三対）

18 備中・吉備津神社の師子狛犬 —— 獣表現の中世的展開 ——

19 京都御所清凉殿安置の師子狛犬

20 神馬考 —— 新城・石座神社像を中心に ——

21 二十八部衆の動物標幟 —— 五部淨居天像をめぐって ——

22 東寺舍利会と八部衆面

【既刊案内】

神像の研究 定価：一三、二〇〇円



神像の研究Ⅱ 定価：二二、一〇〇円



日常語のなかで、
歴史的語源や
エピソードを取り上げ、
研究者が専門的視野から
ご紹介します。

ふうりゅう

風流

風流という言葉は、現在、一般に「ふうりゅう」と読まれる。辞書によれば「ふうりゅう」には、「上品な趣があること。みやびやかなこと。また、そのさま。風雅」「世俗から離れて、詩歌・書画など趣味の道に遊ぶこと」「美しく飾ること。数奇をこらすこと。また、そのさま」などの語義が挙げられている。一方、同じ字を「ふうりゅう」と読む場合、辞書はまず「ふうりゅう」と同様に「上品で優雅なおもむきのあること」を挙げるが、これに続けて「中世芸能の一。華やかな衣装や仮装を身につけて、囃子の伴奏で群舞したもの。のち、華麗な山車の行列や、その周りでの踊りをもいう」という語義を記す。延年舞の演目に「ふうりゅう」と呼ばれるものが伝わるのも、その名残であろう。

一五世紀、この「ふうりゅう」と呼ばれる風流物が大流行を見せた。「婆娑羅」と呼ばれる、派手で奔放な振る舞いを好む美意識が生み出された室町時代の「風流」は、華麗な造り物や、それを競う視覚的・祝祭的な文化を指すこともあった。伏見宮貞成親王の

日記『看聞日記』には、賭け事の会場を飾る装飾や賞品として「風流物」がしばしば登場する。

その一例が、富士山を象った造り物である。大形の伏籠に紙を貼って彩色し、山頂には雪に見立てた綿をかぶせた。麓には高欄付きの橋を架け、橋の上には手斧と鋸を置いたという。この趣向は『古今和歌集』仮名序の一節、「富士の山も煙たたずなり、なにはなるながらの橋もつくるなり」を踏まえたものである。かつての繁栄や古い習わしが失われ、世が移り変わってしまったことを嘆きつつ、人々はただ残された「歌」によって昔をしのび、心を慰めるほかない——そう結ばれる序の言葉を、造り物という視覚の形で再現してみせたのである。

私たちは今日、「風流」と聞くと、静かに月を愛でたり、書画を楽しんだりする姿を思い浮かべる。だが、中世の「ふうりゅう」から聞こえてくるのは、活気に満ちて賑わう人々の姿である。趣向を競い、賭け事に熱中し、時に人を驚かせる奇抜さに歓声を上げる。そうした華やかで、いささか騒々しい世界もまた、かつては「風流」と呼ばれていたのである。

(石橋健太郎・帝塚山学院大学教授)

てーたいむ

『神像の研究』 三部作の完結によせて

伊東史朗
(京都国立博物館名誉館員)

神像研究の基礎を築くことを目的とした『神像の研究』シリーズ三部作の完結編『神像の研究Ⅲ』が刊行されました。著者の伊東史朗さんに、お話をうかがいました。

■神像研究の道へ

—— 本日はご自宅にお邪魔しています。素敵な書齋ですね。「書くこと」を中心に考えたお住まいに見えます。

伊東… 住まいは結局、研究中心になっちゃいますね。日当たりが良くて風通しも良いでしょう。夜は宇治川の波音がよく聞こえます。

—— 玄関に瓦の断片が飾ってありますが、かつては考古学少年だったということ。

伊東… 少年時代を過ごした滋賀県の米原は、水中遺跡で有名な土地で、田んぼの畔で土器の破片を見つけたりしていました。

—— 伊東さんの文章は客観的で論理的、構造が明確で理系のような印象を受けます。

伊東… 叔父が建築家（丹下健三―編集部注）だったこともあって、一時は建築学に憧れましたけど、理系科目がダメだったので諦めました。語学は得意でしたから、大学では仏文でもとも思いましたけど、結局、考古学に入りました。それも半年で挫折して、美術史に転向したのですけどね。

—— そんな混迷の時代があったのですね。卒業後はずっと彫刻史一筋で、京都府立総合資料館、京都国立博物館、文化庁と渡り歩いて、最後が和歌山県立博物館の館長です。

伊東…その都度、引き抜かれたというよりも、流されるままでした。

仏像に最初に惹かれたのは、大学一年の時に出会った伊豆・願成就院の運慶作の仏像です。美術史の研究は、その作品に美を感じて、その成りたちを知りたいと願うことから出発するもので、そういう考え方はこの時から変わっていません。感覚や直感を大事にする一方、何よりも形を論じないといけない。

神像を意識し始めたのは京都国立博物館に移ってからです。京博には所蔵品や寄託品に神像や師子・狛犬がたくさんありました。松尾大社の三神像など、神像の根本みたいな御像もあって、師子・狛犬にも良いものが集まっていたので、定期的に展示していました。

——定年まで現場で奔走して来られて、一冊目の『神像の研究』刊行時に喜寿でしたから、『Ⅲ』まで続くとは私は思っていないませんでした。

伊東…一冊目の『神像の研究』は、定年後の自分なりの「まとめ」のつもりだったんですけど、書いている内に別のテーマが色々と出てきて『Ⅱ』が出来ました。同様に『Ⅲ』まで出来てしまったけれど、結果的に、『Ⅲ』が一番面白い。

——分量も最大です。私は伊東さんの「書きまくっている」時期しか知らないのですが。

伊東…私の人生で「書ける」という手ごたえをもったピーク時は三回あります。最初が、京博で平成三年に担当した展覧会「院政期の仏像」展の頃、次が、平成二十七年から『仏教芸術』誌に連載し

た「神像新資料」シリーズの頃、最後が四年前から今に至る『神像の研究』三部作の頃でしょうか。

——四〇歳代、六〇歳代、そして七〇歳代からですね。今回の三部作は神像がテーマですが、仏像について書いた論文もいろいろあります。

ずっと書き続けることが出来た理由について、何か思いあたりがありますか？

伊東…はつきりとした師匠を持たなかったことも、逆に良かったのかもしれないです。個人的に一番大きな影響を受けたのは京博時代にお世話になった故・井上正先生ですが、強く結びついた師弟関係というわけでもなかったもので、あまりしがらみも無く自由に考えて書くことが出来ました。酒を飲まなければ、もう少し長く、もっと良いものが書けたのかもしれない。

——現在八〇代でいらっしゃるのですが、美術館（MIHO MUSEUM）の研究顧問や、書籍の総監修（『神像彫刻重要資料集成』、国書刊行会）をされていますね。

伊東…齢八〇を越えた我が身にとっては、切実な問題が身の処し方です。来し方を振り返ると、六〇歳で定年に達して以降、和歌山県立博物館にお世話になり、のちに予期せぬ大病にかかり、数年前からは定期的に通院する羽目になりました。三部作を書き終えてもまだ書きたいことはあるのですが、健康状態からして難しい。これからの生き方をどのように充実させるかが、今抱えている問題です。

■調査の思い出

—— たくさんのお像・神像を調査してりましたが、自分からお願いするのでしょうか。依頼されるのでしょうか。

伊東…圧倒的に前者ですよ。特に、神像は修理さえされていないものが多いですから、触れることすら昔は考えられなかったものがあるでしょうね。住職や宮司さえ見たことがないという像もありますから、普通は見せていただけない。信仰心に護られてきたものですから、何度もお願ひしてようやく見せていただけたものもありますし、見せていただけなかったものもたくさんあります。印象的な御像との思い出を教えてください。

伊東…これまで関わらせていただいたいづれの調査の機会も、僥倖としか言いようがなく、長い間大切に護って来られた御像を見せていただいたことに、心から感謝しております。

その上で、一番衝撃的だったのは仁和寺の薬師如来坐像（北院薬師、国宝）です。当時の門跡様の英断によります。昭和の終わり頃、京博が仁和寺の総合調査をしており、その最後の最後に「見て良いですよ」と言っていた。文献上は知られていましたが「幻の仏像」とも言われていましたから、半信半疑でしたけど、実際にお持ちいただいたら、まさにそのものでした。

—— すぐに重要文化財に指定され、翌年に国宝になりました。

伊東…それから平成二年頃のことですが、京都・伏見の北向山不動院の不動明王像（重要文化財）です。こちらは私の方でお願いをずっとしていて、ある時お電話を頂いて、見せていただけることになりました。おそらくあるのではないかとは思っていたのです

けど、一方で、本当にあるとは思わなかった。

作者も制作年もわかるもので、過去にほとんど修理もされていませんでした。文化財指定をしてすぐに解体修理をしたら、構造も非常に珍しいものでした。平安後期の康助という仏師の作ですけど、平安後期らしくなく、むしろ鎌倉時代の仏像のような感じで、しばらくは半信半疑の状態が続いていましたが、結論としては平安後期の奈良仏師による先進的な作でした。周りの研究者も議論してくれたので、ようやく指定に至りました。

—— ご神像で印象的だったのは。

伊東…平成十五年に重要文化財に指定された御調八幡宮の神像七軀、なかでも女神像ですね。おそらく神功皇后だと思うのですけれど、我が国最古の女神像の可能性が有ります。

それからもう一件、北野天満宮の鬼神像十三体です。こちらも



女神像(広島・御調八幡宮 9世紀末)



女神像(広島・御調八幡宮 9世紀前半)

ずっとお願いしている内に、許可を出してくださいました。調査からしばらく経って、文化庁の審議会に出しましたら「こんな像があるのか」と皆さん驚いていました。

——今年、京博の「北野天神」展と奈良博の「蔵王権現」展に同時に出品されていました。とてもユニークなお姿です。

伊東…この像は見せていただく前に、一泊して視^みまでしました。『Ⅲ』で触れましたけど、大將軍八神社の神像群と似たところがあります。ただ、どちらもわからないことが多く、次の世代の研究者に何とか解明してもらえたらと思います。

——調査はどのような契機で申し込むのでしょうか？

伊東…現役を離れてからは、展覧会がきっかけになることが多いです。実際に自分の目でよく見て「これは行けるかもしれない」と思ったら調査をして書く。展覧会は重要なきっかけです。なんとなく見て流すのか、向き合うのか、これが「分かれ道」です。

■仏像と神像の違い

——この三部作は、神像研究が仏像研究に比して遅れを取ってきた状況を見据えて書かれたとのことですか。

伊東…神像研究は未開拓でしたから。今までのように仏像研究の分野とするのは良くないと思っていました。おそらく作者は仏師でしょうから、仕方ない面もあると思いますが、そういうことを分かった上で、神像と仏像は別だということを考えるべきだと思います。

——どこが大きく違いますか？

伊東…まずは仏と神の違いがありますよね。それから、仏像はほとんど技法が進化して寄木造・内刳りなど色々な作り方を開発しますが、神像はそれをしない、意識的にしていない。

——なぜでしょうか。

伊東…木に対する信仰でしょうか。神像でも寄木造はあることはありますけど、あまりないですね。表情も仏像みたいに変化に富んでいないです。割と憤怒形が多く、それから柔和な顔が続きますが、そのぐらいです。仏像には十二神将とか天部のような仏法を守る役の像はありますが、神像はどうなのか。そういうことをもう少しはつきりさせないといけないと思っていますが、今のところは手が回ってないですね。束帯形の男神像、宮廷女官形の女神像は、明らかに仏像の菩薩形を天部形神像が取り入れているようです。

——神像に憤怒の顔が多いのはなぜでしょうか？

伊東…修験道の影響でしょう。仏像もそうですが、憤怒形というのは全てなんらかの天尊の守護です。本来、神像というのは怒っていないのです。普通の顔をしているか、笑っているかです。憤怒形が多くなったのは、蔵王権現の影響で、蔵王権現は金剛蔵王という仏像から来ているので、神像の起源のひとつは仏像ということですね。

——製作者については？

伊東…神像の場合、誰が彫ったかということはほとんど分からないのです。まず銘文がほとんど無い。「私が造った」ということを主張するのがはばかられたのでしょうか。文献でも「あの神像は

誰々が造りました」という記事は皆無ですし、そもそも神像造立に関する文献記事というのがほとんど無いですね。

■神像を研究すること

— そういう手掛かりが少ない中で研究をしていくには、どうしたらいいのでしょうか。

伊東..それはもう、物に即して考えるしかないですね。美術史の根本です。色々な切り口があると思いますよ。理系で神像の材質からアプローチして面白い結論を出している研究はあるのですね。文系でも何か面白い切り口を見つけてくれたらと思います。

— 研究で、迷ったり悩んだりすることは多かったですか？

伊東..実は神像研究で迷う要素はあまりないのです。仏像の場合は、図像など色々な問題が派生してきて、「このテーマはやめちゃうか」と思うことはありますが。神像はそういう問題があまり出てこない。仏像は根拠とする文献が色々あり、その文献の解釈があり、銘文の解釈があり、それから図像の解釈がある。対して、神像はそれほど厳密じゃないです。まず文献がないし、銘文が少ないし、図像はまちまちで、分類分析するまでもない。あんまりそこから問題が出てこない。

— 強靱な精神力で続けてこられたのかと思っていました。

伊東..そんなことないですよ。それから、神像は仏像みたいに移動することが少ないです。仏像は災害などに際し移動しますが、神像にはそれが無い。火災で焼けてしまったら、造り直すかどうかを大議論するぐらいで、結局造らないというケースがあったよう

です。清いものですね。

— 以前、作品をご覧になる姿を拝見した時、作品から情報を読み取る速さに驚いたのですが、パツとご覧になった時の直感というのはいったい正しいものなのですか？

伊東..神像はね、決め手がないのですよ。だから、そう思ったその方向で一旦考えを進めるということをしてきました。もちろん、「見る」という経験をたくさん積み重ねてのことです。良い作品に限って見せていただけないという難しさはありますが。

■神像の歴史を辿る

— 以前から「神像の歴史を通史的に捉えてみたい」と仰っていますが、どのような歴史的構想が御座いますか。

伊東..まず本地垂迹説というのが神像出現の核心です。かなり早い時期から、神仏習合・本地垂迹の現象があります。その上で、神像の彫刻が何をきっかけに始まったかと考えると、おそらく三つに分けられると考えています。

第一は、一番古く、長岡京の時代と考えているのですけど、広隆寺の秘仏本尊の吉祥薬師に代表されます。吉祥天の姿をしながら薬壺をもつ姿で、いわば複数の仏像の集合を神と感じたということです。第二が、延暦年間、平安京遷都の頃に造られた東寺の男女神像です。後世に一般的になる束帯形の男神像と天部形の女神で、本格的な神像の姿がここから始まると思われます。第三が、『Ⅲ』で触れた石清水八幡宮の極楽寺本尊（現在は誓願寺蔵）の阿弥陀如来像です。この原本は九世紀末に造られた像で、一般的な仏

像となら変わりの無い仏形です。

——この三つの現れ方が重要という事です。

伊東..その後の平安時代の神像の行方をかなりはつきりと示しています。

現在の常識的な理解では、神仏習合という現象がまずあり、平安時代に入って本地垂迹説が現れるとされています。つまり、今挙げた三つの形態が第一から第三へと順次現れてくるというもの、第三の仏形はその最終段階に位置するものかと思われていますが、私は、これについて再検討する必要があると考えています。この三つは共に実は早い段階から、かなり短期間に、ほぼ同時と言っても良い時期に現れています。その後には造られた神像はたくさんありますが、もとを辿ればこの三つの内のどれかに当てはまるのではないかと思います。

——たいへん興味深いお話です。

伊東..きちんと書いてみたいのですけれど、なかなかかばかりません。

■神像研究のこれから

——現在の研究に思うところがありますか？

伊東..美術史学では、銘文や文献を必要以上に有難がる傾向があるように感じます。確かに、銘文も文献もとても大事ですが、そればかりに集中するのではなく、やはり「もの」について考える学問ですから現物を対象にしないといけない。一方で、直感的・印象的に捉えて、それだけで突っ走るのも良くないと思います。

す。「良い」と感じる、「美しい」と感じるのは結構ですが、それがどこから来ているかということ客観的に論じるのが美術史学の本質だと思うのです。

——「もの」をよく見ましようということですね。

伊東..そうですね。やはり形状を正確に把握して、この形はどこから来ているのかを考えるということです。美術史研究で一番大事なのは、形をまず理解して、そこからその研究の第一歩である名称が何であるかを導くということです。私の過去の仕事についても、これから研究をされる方々にとっては、批判的に捉えてさらに展開していただけたらと思います。

(二〇二六年六月〜七月 於・伊東氏宅)

伊東史朗著 神像の研究Ⅲ

B5判上製三六二頁／
定価 一三、二〇〇円
▼詳細は表紙裏参照

奇蹟の心性史

『ヤヌス學大全』の出版によせて

にし
の
よし
あき
西野嘉章

『ヤヌス學大全』が近く出版できることになった。この本を手掛けるきっかけとなったのは、一九八五年の季刊誌『スフィンクス』に寄せた連載記事「奇想図譜」であった。そのことを思えば、緒についてからすでに四〇年以上、仕事を曳きずり続けてきたことになる。資料の収集と記載、原稿の加筆と推敲、それを飽きもせず、繰り返す。われながら呆れかえらざるを得ない。その仕事によりやくピリオッドが打てることになったのである。

表題に掲げたヤヌスとは、そもそもが古代ローマの伝説に登場する王の名である。ヤヌス王は背中合わせに、ふたつの顔をもっていた。そのおかげで過去を知り、未来を予見できた。ラティウム
の初代国王として祀られただけでなく、その面貌のゆえに、旧と新、前と後、内と外などの臨界点に適う存在とも見なされた。一日、一年など、ものごとの始まりを司る神格になぞられたのも双面の故である。古代神話に由来するヤヌスは、やがて身体部位が二重化した存在を指し指す普通名詞となった。歴史的な固有名詞が普通名詞として用いられているというのは、古代の賢王にまつわる故事が、およそすべての異形圖像の生成と解釈に、多少な

りと影響を与えていることの証でもある。

古代ヘレニズム世界に生まれた双面ヤヌスは、ケルト人の土着信仰、キリスト教の神学解釈、人文主義の古代神学の影響下で、双頭ヤヌス、三面ヤヌス、三頭ヤヌス、多面ヤヌス、多頭ヤヌスなどに変容を遂げてゆく。そのため、「ヤヌス學」の研究対象は、右に列挙したものばかりでなく、ヤヌス現象もしくはヤヌス化現象と呼べるものを含む奇態な圖像眷属一班となる。分布域は古代バビロニアの印刻から二〇世紀のシャガールまで広大無辺である。ばかりか、個別の主題に縛られることがない。ヤヌスの圖像は一個の類型的な思考を表す視覚装置、すなわち、古典古代から現代まで、西洋的なモノの見方がついぞ捨て去ることのなかった、視覚の類型的思考形式の一つと言うべきものである。

いづれにせよ、ヤヌスの展開は時空スパンが広くて長い。そのこともあって、研究の途中から、本の表題に「大全」を冠したいと思うようになった。大風呂敷を広げる以上、ゆっくりとしたペースで書き続けられ良いではないか。そのように割り切ることができた。長く書き続けることになった所以である。

一九九四年の春、東京大学に奉職し、大学博物館での本務に追われるようになり、資料の収集も思うに任せなくなった。それでもなにか関連するものが見つかれば、フアイリングを怠らぬよう努めてはきた。がしかし、それでも仕事を投げ出したくなることがあった。職場に隣接する医学系研究科医学部の標本室で、畸形の液浸標本群を初めて眼にしたときのことである。東大の旧医学部には、異形発生の原因を、ヒトのみならず生物種全般に亘って探ろうとした研究者がおり、写真など多くの学術標本が遺産のなかに残されている。そのことも後になって知った。サンクトペテルブルクにあるピョートル大帝の「驚異の部屋（クンストカメル）」や、ベルリン、パリ、フィレンツェなど、欧州各地の大学附属医学博物館での視覚経験も追い打ちとなった。図像を知ることと実物を視ること。両者の懸隔を前にしたときの衝撃のゆえに、正直なところ、仕事を継続することに躊躇いが生じたのである。

たしかに、図像学の視点、宗教学・象徴学・解釈学の論点などといった、人文学的なアプローチによる「ヤヌス學」ではある。とはいえ、歴史のなかで繰り返し生起してきた発生現象、それらの実相がメディアを介して突きつけてきた「現実」を前に、書くのを止めた時期もあった。ベトナム戦争で乱用された化学物質が後の世代に残した悲劇、チェルノブイリ原発事故が惹起した放射能汚染の帰結。そうした二〇世紀の負の遺産もまた、史的な議論の枠内で論じなくてはならないのか。結合双生児や双頭子羊は、今もなお、たしかに存在する。それらが実在するという「現実」は、およそ無限の形態異同をもたらす生命現象の神秘と言うべきもの

であるとはいえ、われわれはそうしたものが社会的・政治的・文化的な意味合いを有するということを黙過できるはずもない。そのように自問せざるを得なかったのである。

「現実」は直視せねばならない。そのように言えば、たしかにそうである。そうした思いに駆られたときに思い起こされたのは、アルブレヒト・デューラーが残した、あのペン素描のことである。ニルンベルクの巨匠は、教会が「エリーザベトとマルガレーテ」なる二人の嬰兒として授洗した結合双生児を、「現実」の実相を超えた、堂々たる古典的な人体像として描いてみせた。医家の実態的な記録と画家の芸術的な素描を、単純に見比べて良いのかどうか。とはいえ、解剖学的な「現実」と形象的な「現実」を混同してはならない。造形的なメディアは対象を良き形態で包み込むことで、「現実」を超えることができる。そのことを忘れてはならないのである。

中世後期から近世初期にかけて生きた人々のなかには、異形を忌むべきものとして断罪せず、むしろ神意の顕れとして積極的に興味づけようとする者がいた。それに対し、近代医学は結合双生児を「異常なもの」と決めつけ、二体に切り離し、「正常なもの」にすこしでも近づけようとしてきた。手塚治虫が『ブラック・ジャック』第四巻の「二人のジャン」で如実に示してみせた通りである。近代医学の説く生体観は、古くから受け継がれてきた「奇蹟の心性史」と、およそ相容れぬものである。ヤヌス図像の長い歴史を顧みると、そのことがわかるに違いない。科学的な言説の逢着する先にあるのが、絶対的な「解」であるとは言えない。それが歴史の物語るところである。

（東京大学名誉教授）

音曲の近代史を試す

細川周平
ほそかわ しゅうへい

日本の流行歌史に興味を持って四十年近くたつ。最新の曲やバンドしか知らなかったところに、その原点を探ってみようという気分を盛り上げてくれたのは『ミュージック・マガジン』編集長中村とうようだった。同誌がかつて「日本の芸能一〇〇年」枠で連載した朝倉喬司「チンドン屋が街をゆく」に、当時進行中のチンドン論で助けられたので、その後釜の打診は嬉しかった。

その頃東京で実働していた最後のチンドン屋と知り合い、三味線太鼓にサクスを合わせた半即興のひょうきん連中は戦後音楽史のはみ出し部分にあつて、ある面ではニューウェイブ、実験ジャンルよりも自由に、新旧東西音楽融合を果たしていると応援した。平成二（一九九〇）年、「西洋音楽の日本化・大衆化」の副題で一年一二回の予定で連載を引き受けたところ、五年にふくらみ全六〇話、黒船来航から終戦までの軍楽隊と学校唱歌に始まる洋楽受容史の通例を、クラシック中心の脈から大衆歌謡、歌劇、ダンスホール、軍国物などポピュラーの脈に応用した。黒船の楽隊には文化接触上の起点という意味があつたのに対して、終戦で範囲を区切つたのに理論はなく、昭和の部分で話題が急増して、着

地できそうにないと危惧したからである。これは幸いにも『近代日本の音楽百年』全四巻（岩波書店）にまとめることができた。

洋楽受容史は在来の歌楽器演目に不満なく接していた人々が、外來の歌楽器に最初はその場に合わせて対応し、次に生活上必要があつて実行し、やがて興味を持つて演奏し、一部は職業的に教え演じ、和洋融合した独自の創造に向かい、ついに国民の楽となる歴史を描いている。点が線になり面になる拡大の歴史である。学校と軍が洋式を採用すれば、人々の耳の抵抗が収まり、享受に向かうのは時間の問題ともいえる。今日の状況からして自然な発展史観だが、かつては「唱歌、校門を出ず」と言われ、学校で歌わされる歌を子どもたちは教室の外で歌い直さなかった。親にも何のための授業なのか理解できなかった。軍楽隊の公開演奏でも西洋曲は珍しがられても鑑賞には至らず、庶民層には行進用の太鼓と三味線曲・民謡の編曲だけが喜ばれた。

校門の外に広がっていた伝来・在来の楽はどのように外來の楽を迎えたのか。それを次の問いに設定したとき、伝統種目の維新以降についての歴史研究が少ないことを知った。洋楽受容・接触

に匹敵する蓄積はなかった。そこで倉田喜弘『芸能の文明開化』(平凡社)の続編を書いてみたくなった。「洋楽受容」の次は「邦楽需要」と語呂の良い目標も生まれた。

「邦楽」は明治末、東京音楽学校(今日の東京芸術大学)に邦楽調査掛が開設されて常用語になった。「音楽」と同じく維新後の日常語である。文部省が music の翻訳語として、それまで外来の歌演奏を指すだけだった特殊用語「音楽」を採用して日常語となったのに二十年遅れる。戦前昭和にその学校が西洋楽専科では国勢にふさわしくないと能、琴、三味線のコースから成る邦楽科を創立したときも、無理やり上野入りさせられたようで、師匠も学生もおまけの稽古場という程度にしか考えなかった。そもそも日本の楽は雅楽、能楽、俗楽で歴史上別々に運営され、統一する教育・組織・概念作りにはそぐわなかった。西洋音楽は聖俗各地で共有の原理や記譜法や楽器が特徴だが、日本では、広義の日本語使用以外その三楽に共通する特徴はまず何もない(それも漢文や舞台語や地方語で下位分類され、互いに了解不能のことも多い)。その歴史には〈軍〉〈学〉ベースの国家事業の民間化・大衆化とは別の発想が必要とされるだろう。

下書きしながら思いついたのが「日本音楽」「邦楽」「伝統音楽」などに代わって、「音曲」を在来の楽全般に採用することだった。「音楽」は明治以前、渡来の楽を指す特殊用語で、「日本音楽」という言い方は「日本洋食」のように矛盾して聞こえただろう。それに対して「音曲」は本来、町人向け種目限定語だが、私は反則承知で、国の芸事全般を指す語に濫用して、「音楽」にはない現地

意識のニュアンスを伝えようと考えた。明治語にふたをして、「邦楽」よりも「和楽」の語で伝統種目を指し、「芸術」よりも「芸芸事」、「伝統」よりも「在来」を用いるのも現地寄りの表明で、政府筋が推進し文明開化の一端を担った「音楽」から距離を取る論を組もうと考えた。洋楽受容のパラダイムが盛り込めなかった日本の芸能百年に、用語法から近づいてみた。

こうしてまとめたのが近刊『音曲の近代百年』で、題名からして先の四巻本の続きであることを明記している。洋楽受容の関門、芸術と教育の起点、東京音楽学校については、明治末の邦楽調査掛や昭和の邦楽科創設について概観した。これまでクラシック、ジャズ、流行歌のような新来分野に関して調べられてきたレコード、ラジオも、かなりの在来の楽のファンが聴き込み、実演との違いについて感想を持ち、種目、曲目、演者を聴く耳が変わったと述べている。和洋を問わない部分と和楽ならではの部分がある。

現地寄りの語感に馴れると、歌舞音曲の四文字合体、歌十舞十音十曲は昨今の「パフォーマンズ」「アクション」などより具体的・総合的に音響身体表現を指すと思えるがどうだろう。近世和物に限定するには惜しい。もし明治に東京音曲学校が創立され、和洋楽が同じ国家機関で共存したなら、と架空の歴史を思うことがある。実際、東京音芸学校の設立を明治の三味線の師匠連が相談した記録がある。語彙の選択は口先の遊びにしか見えないかもしれないが、当人は案外真面目である。

(京都市立大学伝統音楽研究センター元所長)

宮座文書の過去・現在・未来

わたなべ 圭一

江戸時代は、地域社会のさまざまな主体が大量の文書を作成した時代である。そのひとつに、神社などの祭祀組織が保管する文書がある。祭りのルール、メンバーの名簿、当番にあたったときの仕事内容、費用の計算など、その内容は多岐にわたる。筆者が専門とする民俗学という分野でも、地域の神社の祭りや伝統行事といった、いわゆる無形民俗文化財の調査では、祭りの担い手を持ち伝えた文書を参考にする機会が多い。

奈良県天理市新泉町に鎮座する大和神社は、毎年四月一日の「ちゃんちゃん祭り」で知られる。周辺の九か大字（村落）が担うお旅所へのお渡り行列の華麗さが特徴で、二〇一四年度から四年間、総合的な調査事業が実施された。九か大字のひとつ成願寺町では、江戸時代には「座衆」や「座中」とよばれる家々の祭祀組織が活動していた。歴史的には、室町時代の一五〜一六世紀ころに遡る可能性がある。民俗学では、こうした祭祀組織を宮座とよぶ。二〇一六年一〇月、市の担当者と調査員数名で、成願寺町に伝わる文書箱の調査に出かけた。

ひととき厚みのある一冊の帳簿は、年々の横帳をまとめて綴じ

合わせた形式で、嘉永五年「神田講中立会之上造用帳」と題された座衆の定書^{さだめがき}にはじまる。一枚ずつめくっていくと、文政一三年、宝暦八年、享保二〇年、延宝二年、慶安元年、正保四年と歴代の横帳が出てくる。さらに、折紙に書かれて綴じ込まれたものが数丁分続く。さいごの元和二年（一六一六）の「シヤウクワン^{（成願寺）}□^{（祭礼頭）}マツリタウノツカ井日記」がもつとも古い。

祭りでは、神事や宴会の準備をする当番（当屋）が大きな責任をもたされた。そのため各年の記録も、当屋の順番やそれが調える品物の取り決めに重点がある。元和二年の当初は、明文化された定書はまだ見当たらないが、唯一、以下のような記事がある。「サノ日、ユウメシマテ、サシウマテ」。直前の丁に元和八年（一六二二）の記録があるので、あまり変わらない時期に書かれたものと思われる。わずか三行のこの文言はなにを意味するのだろうか。

二〇年ほどの空白を経た万治三年（一六六〇）に、初の本格的な定書が作られる。こちらは二丁におよぶ文章形式で、「一、晦日ノ朝おとな衆かゝ衆、餅二合ツ、ノニツツ、やとよりふるまい申候」、「いんきよノ人ハ万事よび不申候」といった条項がある。類

推すれば、「サシウマテ」^(座衆)とは「かゝ衆」(女性)や「いんきよ」は饗応の対象外であることを指したものであろう。「ユウメシマテ」^(タ飯)は、朝昼晩の三食を振る舞うこと、の意味らしい。

してみると右に掲げた三行のメモは、じつは宴席における当屋の負担を取り決めた、ごく萌芽的な座衆の定書にあたる文書であったことがわかる。「かゝ衆」や「いんきよ」を除外することは、宴席に出る資格を制限し、当時存在感を増していた百姓の家を基礎とした、一軒一名の原則を定めたものだ。わざわざ半丁分を費やして書いているところを見ると、この文言をあえて書き付けなくてはならない動機が働いたのであろう。

一七世紀も比較的早い時期に、読み書きに習熟しはじめた村落の人々が、領主への対応や村政の必要から文書を保管し、またみずから作成をはじめの様相はこれまでも知られている。ただそうした読み書きの担い手は、村請制を担う庄屋などの村役人にはかぎられない。祭りという分野でも、当時再編されつつあった座衆の規範を、言葉から文章へと徐々に移し替えていく営みがあったことを、右の一事例は物語っている。

ちなみに成願寺村の座衆の取り決めは、その後、宝暦八年の「座中定之帳」や享保二〇年の「当屋定之帳」など、歴代の定書の形で残されている。さらにべつの帳簿では、明治から大正年間、そして戦後の昭和五〇年代末に至るまで、毎年の祭りのルールの変更点などが記帳されつづけている。わずか三行のメモを起点として、祭りの規範を明文化して記録するという、数百年におよぶ長い伝統が受け継がれてきたのである。

宮座の文書のおもしろさのひとつは、こうした片々たる記録が紡ぎ出す歴史をよみとくところにある。村役人の文書とは異なる世界がそこには広がっている。近く刊行される拙著『宮座と村落の歴史民俗学』は、こうした宮座文書の調査に各地で取り組んだ成果をまとめたものである。ただ宮座文書を扱う上で、ある種の危機感が伴うことも、あわせて書き付けておかななくてはならない。それは一言でいえば文書の散逸、滅失の問題である。

祭りの文書にはかぎらないが、地域の文書がおかれた状況は日増しに悪化している。じつは本書の執筆中にも、ちゃんちゃん祭りに関わる大字の某旧家の文書が大量にオークションサイトに出品されているのをみた(調査事業の間にも存在は知っていたが、事情あって閲覧が叶わなかった)。迂遠なことではあるが、文書の散逸を防ぐには、まずその文書への関心呼び起こすほかはない。本書がわずかでもその助けになればと願っている。

(筑波大学人文社会系准教授)

渡部圭一 著

宮座と村落の歴史民俗学

―近世文書にみる村々の祭祀―

A5判上製・約五〇〇頁／定価九三五〇円

▼詳細26頁

画像史料はネットオークションが頼り

なか
がわ
おさむ
中川理

ある本を思文閣出版から出す予定である。それは、ある組織が明治以降日本中に建設した建造物についてまとめたものである。その組織、その建造物とはなにか。それを説明したら長くなってしまうので、出版まで待つてほしい。ともかく、その建造物は、日本中におびただしい数が建造されたのである。しかし今はほとんど残されていない。

なぜ残されていないかというの論点になるのだが、それよりも、なぜ今は残っていない建造物について書くことができたのか。私は、建築や都市の研究が続けてきたが、建築については今残っている、つまり現物が目の前に存在するものが主な分析対象となってきた。モノがなければわからない。そういうことである。しかし、それだけでは建築の分析から都市の歴史の全体像にせまることは難しいのではないか。そうした認識を持っていたのだが、今回取り組んだ建造物群は、モノはないが、ほとんどの場合、写真が残されていた。

写真といっても詳細なものではない。竣工の時の記念絵葉書の写真である。正面写真だけの場合が多く、建築の詳細はわからな

い。でも、そのわずかな情報だけでも、積み上げていけば何かかわかるのではないか。無謀と思われたが、それをやってみたのである。その成果については、実際の出版物で判断していただきたい。そうしたかなり不確かな情報だけで、何を明らかにできたのだろうか。著者自身も、その成果の評価は楽しみである。

歴史学では、その史料とは文献史料が中心になる。でもそれは、古文書と言われる、過去に書かれたものである。建築は、現存していなければそうした史料がないのと同じである。今回使ったのは、古文書ならぬ古画像みたいなものと言えるだろう。ただし、解像度の粗いものだ。でも、歴史史料としての古文書も、同じように解像度にバラツキがあるわけで、粗い解像度の古画像でも、その解釈の仕方、歴史史料として使えるのではないかと考えたわけである。

まだまだ頼りないが、そうした古画像も、最近になり、歴史史料としての価値がようやく認められるようになってきた。公立の図書館や文書館において、古写真の画像データベースのようなものが公開されるようになってきている。画像の前に、古い地図のデ

データベース化がいろいろ出てきた。これにより、今はなくなってしまうている建築でも、それがどこに立地していたかがある程度わかるようになってきた。しかし、地図の数は限られるが、古写真などの画像データは、集めようとするは際限がない。公式な記念絵葉書からプライベート写真に至るまで限りなく存在する。図書館等が集めるものは、今のところごく一部に留まっている。

研究を進めるにあたり、今回はもっぱらオークションサイトに出品される絵葉書に頼った。ヤフオクである。かなり古くから、ヤフオクでは絵葉書が出品されてきた。でも、そのほとんどは数百円で入札できた。まだ、絵葉書に商品価値がなかったからだ。それが、研究者たち、とりわけ建築歴史系の研究者たちが、しだいに史料価値を見いだしていくようになる。建築物だけではない、商店街や住宅地の風景などが、都市史研究の高まりから、競って入札される古写真になっていった。現在では、いいものは常に千円を超える入札額になるようになり、絵葉書を専門にあつかう業者もいくつか登場してきた。

しばらく、毎晩のように、ヤフオクにはりついた。その結果、欲しい建築写真を数多く獲得することができた。古写真専門でヤフオクに出品する業者の中には、「またこいつか」「この種の建築を出せばこいつは買うな」と思った者もいたのではないかと思う。ある時期から、妙に、私が欲しいと思う写真ばかりが出品されるようになったように思えるのだ。それは考えすぎかな。

それにしてもである。出費も嵩むようになった。できれば、公的機関による、古写真データベースがさらに充実してほしいとつく

づく思う。そのためには、古写真が歴史史料としての価値を持つものだという認識が、より高まる必要がある。その点で強調しておきたいことがある。それは、今回収集した建築の古写真のほとんどが、建築の竣工を祝う、記念絵葉書であったということである。古写真、とりわけ絵葉書となっているものの多くが、この記念のための写真であるのだ。なかには、何枚かの記念写真がセットになっているものもあり、そうしたセットからは、建築物のさまざまな角度からの姿を知ることができる。これはうれしい。さらに、セットを包む封筒もあつて、そこに建物概要や簡単な図面なども印刷されていたりするものもある。こうしたものを入手できると、おもわずニヤけてしまう。

ここで強調したいのは、出来事の記念性、モニュメンタリティである。建築物が竣工することは、今ではあまりにも日常的なできごとで、当事者以外の多くの人の関心をひくものはない。しかし、かつては建築の竣工は、みなで祝うことであった。絵葉書(セット)を必ず作って配った。そうした記念性が、時間の流れに次々と点を刻んで歴史の流れを作っていく。そう考えると、今回集めた記念絵葉書は、その画像そのものが文化財であると思えてくるのである。

(大阪公立大学大学院客員教授)

中川理・西川博美著

武徳殿―地方都市に成立した武道和風様式

A5判上製 約二八〇頁／定価七、七〇〇円

▼詳細28頁

小栗忠順ただまさの貨幣政策論

福田ふく真だ人まさ

二〇二七年には大河ドラマとして、小栗忠順を主人公とする『逆賊の幕臣』が放映される。小栗は幕末に経済や外交、軍事などで活躍した幕臣で、幕末の三傑の一人とされる。筆者のように大正時代以来、貨幣の明治維新について研究を重ねてきた研究者にとっても、幕末の貨幣政策において重要な役割を果たした小栗の業績が広く知られる機会は喜ばしい。しかし、先行研究の解釈は、開港後、半年程度で貨幣制度改革が完了したとするなど小栗の主張が正確に理解されておらず、ここでは筆者の研究に基づく小栗の貨幣政策論を紹介したい。

幕末の日本では金貨・銀貨・銭貨など多様な貨幣が流通していたが、貨幣価格は法令によって基本的に定められ、金属の含有量と対応していなかった。一方、外国の貨幣制度は金属価格と貨幣価格が基本的に対応していた。開港交渉では、品位を問わず同じ重量の金貨は金貨同士で、銀貨は銀貨同士で交換できるという規定を、立場の弱い日本側はアメリカに認めさせられた。日米修好通商条約のこの貨幣規定は、日本側の特殊な貨幣制度を考慮していない以上、貨幣の金属含有率（品位）すら無視するという、経済的

に非合理的なものであったため、日本から大量の金貨が流出した。

万延元年（一八六〇）に小栗忠順は幕末最初の公式使節であった万延遣米使節に参加した。この使節の表向きの目的は日米修好通商条約の批准であったが、真の狙いは貨幣条項の修正で、領事裁判権や関税が論点になる前の条約改正交渉を特に小栗は担当した。小栗はフィラデルフィアの造幣局で多種多様な日本貨幣に対し化学的な成分分析を行い、日米修好通商条約の問題を造幣局長に認めさせた。分析された金銀含有量を前提に、当面は江戸幕府による一分銀の交換を中止し、変動相場制に改めることなどを、アメリカ国務長官に要求した。この要求は認められなかったが、万延遣米使節での貢献を評価され、帰国後小栗は外国奉行へと昇進した。

一方国内の貨幣政策において、小栗は、渡米前から公正な貿易のために国内貨幣価格を金属の含有量に対応させる根本的な貨幣制度改革が必要であると幕府内で主張し、帰国後も幕府上層部に根本的改革を求めた。しかし、当時の幕府財政は、独特の貨幣制度に起因する貨幣発行益に大きく依存していたため、幕府内では

貨幣発行益を残すことのできる限定的な改革を求める立場も有力で、いわゆる万延の幣制改革は限定的な水準にとどまった。先行研究で国際均衡が達成されたと評価されてきた万延の幣制改革の内容は実際には限定的で、不公正な貿易が続くことになった。自身の献策が受け入れられず、忸怩たる思いを抱えた小栗は外国奉行を辞職した。

翌文久二年（一八六二）に勘定奉行として幕府に復帰した小栗は、独特の貨幣制度を活かした莫大な貨幣発行益を財源として、横須賀に製鉄所（造船所）を作るなど、近代産業の育成や軍事力の増強を図った。また日米修好通商条約の貨幣条項の改定交渉を進めた。この時期にはイギリス大蔵省の貨幣の専門家が日米修好通商条約の貨幣条項を批判し日本側に同情したため、イギリスの外交官オールコックは、日米修好通商条約の貨幣条項を堅持するべきだという旧来の主張を改めており、交渉が進展した。小栗は国内で金属含有量に基づく貨幣価格へと修正する根本的な貨幣制度改革を段階的に進める一方、対外的には慶応二年（一八六六）に結んだ改税約書で造幣局を設置することで、金属含有量に基づく貨幣交換を近い将来実施することを約束し、公正な貿易への道筋を示した。明治元年（一八六八）に戊辰戦争が起きると小栗は、薩長軍に対して徹底抗戦を主張したが、幕府内部で意見が採用されず所領に退いたところ、新政府軍に十分な手続きもないまま処刑された。小栗の死後、小栗の家族は、三井の重役である三野村利左衛門、次いで明治前期に貨幣含め経済政策で活躍した大隈重信の庇護を受けた。大隈は、明治維新の諸政策はほとんど小栗の政策を模倣し

たものに過ぎなかったとして、小栗を高く評価し、小栗家の再興に尽力した。江戸幕府と明治新政府の貨幣政策で重要な役割を果たした二人の政治家の間には、感情的なつながりも生まれていったのである。

小栗の貨幣政策論は、複数の貨幣が競争・補完する体制であった日本の現状と、公正な貿易のために金属含有量に基づく貨幣交換が必要であるという経済原理を、双方組み込んでいた。経済音痴と評しうる当時の英米の外交官よりも、はるかに経済合理的な政策論であった。小栗の急進的な政策論は、幕府内で採用されない場合も多かったが、小栗のような鬼才が幕末の幕政に参画し、政策を少なからず実施していた史実は注目されるべきであろう。

筆者はこれまで近世以来の日本の複雑な貨幣制度を前提に、それが貿易の中でどのように再編されていったかを考えてきた。ここでの小栗の解釈は、筆者の研究から小栗の主張を捉え直し再評価したものである。貨幣にかかわる対外問題は、先行研究で重視されてきた小判だけに留まらず、多様な金貨・銀貨・銭貨・紙幣に及んでおり、開港直後に根本的な貨幣制度改革に失敗した日本は、多様な貨幣についてそれぞれ長期的に国際均衡を実現するための努力を続けることになった。こうした過程について筆者は研究を進めている。

（住友史料館研究員）

TANGOTEXTILE

— 藤布で創る丹後のスタイル

青江智洋 あお ちやう(京都府教育庁指導部文化財保護課)

京都府立丹後郷土資料館は、京都府北部地域における埋蔵文化財等の考古資料、郷土に縁のある古文書等の歴史資料、地域的特色をもつ生活用具等の民俗資料について保存及び活用を図り、府民の文化的向上に資することを目的として一九七〇年（昭和四五）に開館した。

旧国名である「丹後」を冠する当館は史跡丹後国分寺跡に隣接し、特別名勝天橋立を一望することのできる景勝地に位置している。敷地には丹後国竹野郡徳光村（現京丹後市丹後町徳光）の大庄屋であった永島家の主屋（一八四〇年建造）を移築した旧永島家住宅（京都府指定有形文化財）がある。その屋内では民間団体による手漉き和紙作りや竈かまどを利用した飯炊き等の体験活動がおこなわれている。

当館は半世紀余りにわたる活動を経て、二〇二三年（令和五）にリニューアルが決定された。館は「丹後の歴史・文化の探訪と観光の拠点となるミュージアム」を目指し、二〇二七年（令和九）秋予定のリニューアルオープンに向けた準備のため、現在臨時休館

中である。

さて、今回紹介する館蔵資料は宮津市上世屋かみせやでノノと呼ばれた藤布である。藤蔓の皮を剥いで糸に紡ぎ、それを織りあげる紡織技術は「丹後の藤織り」として京都府指定無形民俗文化財になっている。

藤布は古代から庶民の衣料として北海道と沖縄を除く日本各地の山村で織られた自然布である。その多くは木綿の普及にともない姿を消したとされる。各地で失われた藤織りが京都府北部地域で伝承されてきたのはなぜであろうか。それには高冷な山間地で綿わたの栽培に適さなかった土地柄もあるだろうが、藤布が米袋や醬油のしぼり袋、海女が海藻を入れる袋（スマブクロと呼ばれる）、蒸し器の敷布、畳の縁等に利用されるなど、地域の暮らしや産業に根ざした商品価値をもったこと、生産者にとって数少ない現金収入の途であったこと（経済的価値）が大きいだろう。

写真の着物は藤布で仕立てた仕事着（ヤマガと呼ばれる）である。藤

は繊維が頑丈であり、山仕事において硬い枝や鋭い草葉から身を守ってくれる。当資料は上世屋の女性が一九八一年（昭和五六）に製作をしたものであり、重要有形民俗文化財「丹後の紡織用具及び製品（七三三点）」の一点である。

藤布について理解を深めるため、当館が編集に携わった『丹後の藤織り』（京都府ふるさと文化再興事業推進実行委員会、二〇〇七年）を参考にして、上世屋における藤布の製作工程をみてゆこう。



仕事着（ヤマギ） 京都府立丹後郷土資料館蔵

藤織りは山に自生する藤蔓を採集する作業から始まる。これは春の田植え前と盆過ぎの稲刈り前におこなわれる。キコリガマ（木刈り鎌）を使って藤蔓を刈り取り、蔓が乾燥しないうちに木槌で叩いて手で芯から皮を剥ぐ。藤蔓は表皮と中皮と木質部（芯）の三層からなり、藤織りの繊維材料として使うの

はアラソと呼ばれる中皮の部分である。一二月末頃、保管していたアラソを木灰汁に浸け、三〜四時間ほど炊いて繊維の中の不純物を溶かし、繊維をほぐしやすくする。この作業を終えたアラソは、五センチ程度の長さのシノベ竹二本を竹の皮で連結させたV字形の道具（コウバシと呼ばれる）でしごきながら川の水で灰の汚れなどを洗い流す。これをフジコキ（藤抜き）という。フジコキを済ませたアラソをコキソとも呼ぶ。コキソは米糠を溶かした湯に浸してから干すと米糠の油気によってゴツゴツした繊維がふっくらとしてくる。その後、上世屋が雪に包まれる一月から三月にかけてフジウミ（藤漬み）をおこなう。これは繊維の先端を捥り合わせながら結び目を作ることなく繋いで長い糸にする作業である。一着の着物を仕立てるために必要となる一反分を績むには毎日作業をして一ヶ月前後かかる。フジウミをした糸は績んだ部分にしか撚りが掛かっていないため、糸車で全体に撚りを掛けて糸に強度をもたせる。撚糸は糸杵に巻き取り、経糸や緯糸として用いる。続いて織機に仕掛ける経糸の長さや本数等を揃える整経をおこなう、いよいよ機織りとなる。藤糸は機械製の織機に適さないため手機を使用する。一反を織り上げるには数日を要する。

コストパフォーマンス（費用対効果）やタイムパフォーマンス（時間対効果）がことさらに問われる今日において、手間暇のかかる藤織りは経済的価値と別の文脈で継承されているように思われる。それは藤布に魅せられた人、生産にかかる技術や手間暇を楽しむ人、伝統的な藤織りの技術伝承にやりがいや使命感をもつ人らによる文化的価値に支えられているようにみられる。

ものづくりに効率を求めるのは当たり前のことかもしれないが、時間にかかるプロセスをないがしろにして成果ばかりにとらわれると肝心なものを見落としてしまうおそれがある。たとえばかつてフジウミをする女性たちは器用な先輩の家に寄合い、囲炉裏端で世間話に花を咲かせながら作業をしたという。そこでは先輩から後輩へフジウミの技術が伝えられるだけでなく、地域で生きてゆくのに必要となる知識や伝統的な知恵が伝達されることもあったのではなからうか。また、噂話や夫の悪口を言い合いながら連帯感を高めたり、子育ての悩みや苦労話を共有することによって信頼関係を深めたりする機会になったかもしれない。このようなプロセスに付随する所産にははかりしれない価値があるように思われる。

当館の所蔵品（公共財）を利用し、様々なことに活用するのは他でもない府民をはじめとする館の利用者であり、そのサポートを担うのが学芸員をはじめ館の職員である。新しい館は人とモノ、人と文化の結節点として交流と創造を育むハブ・ミュージアムとなることがミッションであり、コンセプトとして地域に受け継がれた「丹後の歴史」と「未来」の融合を掲げている。私たちは藤布（TANGOTEXTILE）のような文化遺産をどのようにに活用し、いかなる未来（丹後のスタイル）を創ることができるのか。また、私たちは新しい館をどのようにに活用し、いかなる未来を創ってゆけるだろうか。ミュージアムが私たちに何を与えてくれるのかではなく、私たちはミュージアムで何ができるのかを問うてみたい。ただし、目先の成果にこだわってプロセスに含まれるはかりしれ

ない価値や館の利点である公共性を見失うことのないよう心掛けたい。

京都府立丹後郷土資料館 (愛称「丹後天橋立ミュージアム」)

2027年秋リニューアルオープン予定

【所在地】

〒629-2234 宮津市字国分小字天王山611-1

※リニューアルに向けた準備のため執務室移転中(宮津市字吉原2586-2 京都府宮津総合庁舎内)

TEL:0772-22-2333

FAX:0772-22-2344

Mail:tango-s-soumu@pref.kyoto.lg.jp

HP:<https://www.kyoto-be.ne.jp/tango-m/cms/>

X(旧Twitter):@tango_museum

Instagram:@tango_museum

【交通アクセス】

◎京都丹後鉄道宮豊線「天橋立」駅または「岩滝口」駅から丹海バス(経ヶ岬、蒲入、伊根方面行き)で「国分」下車、徒歩5分

◎京都丹後鉄道宮豊線「天橋立」駅から車で15分

◎京都縦貫自動車道宮津与謝道路「与謝天橋立」ICから車で10分

【休館日】・【開館時間】・【入館料】についてはリニューアルにともない検討中。

▼「もっと安くありませんか」。著者の方から定価についてのご要望をいただくことは、しばしばあります。編集者としても、担当した本を少しでも安く、多くの方にお届けしたいという思いは持っています。出版不況の中で、値段が上がると、ますます本が売れなくなるのではないかと、という懸念の声があることも承知しています。しかし、近年の原価の高騰は、さまざまに報道されている通りで、物価も数年前とは大きく変わりました。日々購入する食料品などに比べると、本は頻繁に購入する商品ではないため、価格の変化が実感されにくい面もあるのかもしれません。少なくとも弊社の専門書では、売れ行きが単純に価格だけで決まるわけではありません。現在の外部環境の中では、価格に見合った価値をお届けできるかが、これまで以上に問われているのだと思います。著者の皆様とともに、価値ある書籍を世に送り出せるよう、より一層努めてまいります。

▼首里城正殿の復元が一月に完成するそうです。二〇一九年の火災は、『琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究』の出版記念シンポジウムの数日前のことでした。落胆の淵から立ち上がり、復元に関わられた方々のご努力に敬意を表します。

▼制作時にたいへんな思いをされた著者に限って「また本を出したい」とご相談くださるのが不思議。「懲りないですね!」と言いつつ、「もう一冊書いてみよう」と思っていただけるのは素直に嬉しい。(R)

▼最近、昔SNSで見た「ある作曲家の愛用香水」の出版を迫り始めました。軽い気持ちのはずがつい深追いしてしまい、気づけば趣味でも典拠探し。ようやく出版社の人間らしくなってきたのでしょうか。(N)

▼スマホが寿命を迎え新しい端末を使い始めました。以前より画面が大きく、もしや電子書籍が読みやすくなったのではと思いきり、試しに使ってみています。後から紙でも欲しくなるのが悩みです。(E)

▼表紙図版・湯川松堂「令嬢とアコーデオン(仮題)」1902年頃(部分、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター蔵)

▼「ていーたいむ」掲載の女神像写真は、御調八幡宮宮司・桑原國雄様に掲載をご許可いただきました。心より感謝申し上げます。

『鴨東通信』は年2回(春・秋)刊行しております。代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛にお申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

鴨東通信 No.123

2026(令和8)年9月18日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町325

tel 075-533-6860

fax 075-531-0009

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

https://www.shibunkaku.co.jp/publishing/

表紙デザイン

HON DESIGN

猪岡萌菜著

「常陸名所図屏風」研究(30s)

A5判上製・三三八頁／定価 九、九〇〇円

京都府立京都学・歴史館編

東寺百合文書 十七 ル函三・ヲ函一

9月刊行

A5判上製函入・四六〇頁／定価 一六、五〇〇円

東寺文書研究会編

定価 各二五、四〇〇円

東寺執行日記 全三巻

東寺長者系列の寺内の要職である執行の公務記録。本シリーズではその中世部分を翻刻する。
(第一巻・第二巻 オンデマンド版)

山下克明著

定価 九、九〇〇円

『簠簋内伝金鳥玉兎集』の研究 ―その成立と中世仮名暦の展開―

多彩な史料と詳細なテキスト分析をもとに、『簠簋内伝金鳥玉兎集』の成立背景や中世における暦をめぐる動態を明らかにする。

2015年に岩手県で発見された「常陸名所図屏風」。本屏風を地域内部からのまなざしに応じて制作された史料として捉え、絵画・地誌・紀行文を横断的に分析する。

東寺百合文書とは、東寺に襲蔵されてきた、奈良時代から江戸時代初期まで約九百年にわたる、総数一万八千点・二万七千通におよぶ日本最大の古文書群である(二〇一五年ユネスコ世界記憶遺産に登録)。本史料集には「ひらかな之部」刊行中の『大日本古文書』未収録の「カタカナ之部」を翻刻。巻末に収録史料の花押一覧を併載。二年ぶり待望の第十七巻。

既刊・第一巻〜第十六巻(第十巻・第十三巻 オンデマンド版)
既刊揃 一八九、三二〇円

海原亮著

定価 七、一五〇円

近世藩医の学問と医療環境

第38回矢数医史学賞 受賞

藩医たちに焦点を定め、その身分・生業の特質、知識や技術の獲得・継承と社会への普及のありようを明らかにする。

飯沼賢司著

定価 一三、二〇〇円

八幡神からみる日本古代の政治と 社会―新たな八幡信仰史の視座

八幡宮の祭礼や伝承から当時の政治や社会状況を読み解くなかで、八幡神の本質に迫る。

表示価格は税込

角田文衛著、公益財団法人古代学協会編
吉川真司・岡島陽子・櫻井智・山田邦和責任編集

角田文衛の古代学別巻

日本の後宮 新訂版

今冬刊行予定

B5判上製・約三三〇頁／予価九、九〇〇円

『日本の後宮』（学燈社、一九七三年）は、ヨーロッパや中国との比較という世界史的視野を堅持しつつ、王宮の空間構造と後宮のシステムの変遷を明らかにし、数多くの后妃・官女の出自と歴史的役割を綿密に叙述することによって、古代から明治時代にいたる後宮の変遷、その政治史的・文化史的意義を十全に描き出した、角田渾身の著作である。しかし、B4判帙入り、カラー図版多数の超豪華版として発行されたため、研究者個人には行きわたらず、幻の著作とさえ言われる。本書は、判型を扱いやすいB5判とし、角田旧蔵本に残された書き込みを再編集して取り込み、さらに巻末の后妃・女院・主要官女等の一覧表を現代の研究水準にアップデートした新訂版である。

【予定目次】

序章	日本の後宮の特色
第一章	後宮の形成
第二章	平城宮の後宮
第三章	平安の春
第四章	後宮の変貌
第五章	後宮の栄耀
第六章	後宮の残映
終章	後宮の行方
補註	
附録	
歴代后妃表・女院表・斎宮表・歴代主要官女表	
解説 岡島陽子	
索引	

佐野真人著

古代天皇祭祀・儀礼の史的研究

天智天皇系皇統意識（新王朝意識）の見直しを出発点に、平安時代前期を中心とした古代日本の儀礼秩序の構築過程の一端を明らかにする。

定価 一三、二〇〇円

佐藤一希著

近世後期の皇位継承と天皇・女院(30s)

女院や後宮勢力などの天皇家の女性や皇子女・世襲親王家の動向を視野に入れて、近世後期の天皇像を動態的に描き出す。

定価 八、八〇〇円

有富純也・佐藤雄基編

摂関・院政期研究を読みなおす

古代・中世を専門とする中堅・若手の研究者が、摂関・院政期研究の最前線と展望を示す。

好評増刷

定価 五、〇六〇円〔電子版有〕

金玄耿著

中世的身分秩序と家格の形成(30s)

多様な史料を活用し、それらに表れた貴族の出自や身分に関わる言葉を辿っていく。

定価 九、三五〇円

石橋健太郎（帝塚山学院大学教授）著

室町期における茶の湯と「たて花」の創成

12月刊行予定

A5判上製・約五〇〇頁／定価 二、〇〇〇円

茶の湯やいけばななどをはじめ、現代において日本の伝統文化と認識されるものの祖型は、室町期に創作されたとされてきたが、当時の具体的様相は明らかでない。また、従来の茶道史において、中世の茶の湯やいけばなと近世以降の茶道・華道の間には断絶が存在し、両者の連関については等閑視されてきた。本書は、関連史料を精査することにより、先行研究が見落とされてきた中世の茶の湯といけばな（たて花）の実態を明らかにする。中世の茶の湯である闘茶と雲脚茶が、戦国末期に現れる「わび茶」や近世に成立する茶道に連関していく様相と、中世の「たて花」が近世の立花（りっか）に連関していく過程について、具体的様相を明らかにすることを試みる。

茶の湯文化学会編

講座 日本茶の湯 全史〔全3巻〕

桃崎有一郎著

流鏝馬の研究

―騎射の礼制史―

日本文化史の中に位置づけられた茶の湯の展開を、茶の湯文化学会が総力をあけて俯瞰。第1巻中世／第2巻近世／第3巻近代。

定価 各二、七五〇円

日本史において特異な位置を占めてきた流鏝馬。その源流たる古代の「葉獵」前史から、鎌倉幕府の最重要儀礼へと至る過程を、史料に基づいて精緻に解き明かす。

定価 一〇、四五〇円

谷晃・矢ヶ崎善太郎校訂

茶譜

芳澤勝弘著

一休、胡乱を生きる ―『一休和尚年譜』を読む―

近世茶書としては最も大部にして体系的なものの一つである茶譜（全18冊）。西尾市岩瀬文庫蔵本を底本として全編活字化。

定価 二二、〇〇〇円

『一休和尚年譜』の詳細な訳注に加え、墨跡や同時代の古記録を駆使し、一休の生涯を時代の中に位置づける。

定価 一一、〇〇〇円

【予定目次】

まえがき

第一部 中世飲茶の諸様相

第一章 闘茶について―闘茶札と文献資料から探るその具体像―

第二節 文献資料からわかる闘茶の具体像

第三章 闘茶の種目と流行時期

第四章 闘茶と濃茶及び雲脚茶と薄茶の関係性

第二章 「経覚私要鈔」にみる文明元年の林汁

第一部 中世から近世初頭の茶作品の諸様相

第一章 「看聞日記」にみる「たて花」様式の成立への道程

第二章 「言国御記」にみる、宮中の「たて花」受容とその背景

第三章 近世初期の立花の「様相」―『隔簾記』にみる立花―

終章 今後の展望―闘茶や雲脚茶から「わび茶」へ―

付論 参考文献一覧／初出一覧／あとがき／索引

大友一雄著

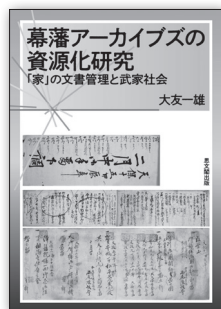
幕藩アーカイブズの 資源化研究

「家」の文書管理と武家社会

4月刊行

A5判上製 三〇〇頁／定価 九、九〇〇円

江戸時代、役職に就いた大名・領主たちの執務の多くは、その「家」の家来たちが担っていた。したがって、老中や奉行への就任では、「家」としての知識や技術の獲得が問われ、師範による研修制度が整備された。転封のさいにはスタッフが入れ替わり、情報・記録の引き継ぎが前提となった。また、身分制社会における文書認識は、厳しい文書管理と処罰を現実とした。本書では、大名家の文書群をアーカイブズとして体系的に把握するために、幕藩組織の構造や機能にまで射程を広げて分析。「家」における記録管理や大名家文書の生成・利用を具体的に解明し、アーカイブズ学と歴史学の両面から武家社会の実態に迫る。



【目次】

- 序 アーカイブズ資源化研究の動向と狙い
- 第1章 幕府寺社奉行と文書管理
 - 第2章 幕府寺社奉行の記録管理をめぐる動向
―法整備との関連に注目して―
 - 第3章 近世中期における幕府勤役と師範―新役への知識の継承をめぐる―
 - 第4章 幕府奏者番にみる江戸時代の情報管理
 - 第5章 天保期幕府老中職にみる公用方役人について―松代藩真田幸貴を事例に―
 - 第6章 天保期における老中職公用方役人と情報管理―老中日記の作成と収集―
 - 第7章 幕府老中職文書群に関する基礎的研究―松代藩公用方役人と文書システム―
 - 第8章 転封にみる領知支配と記録
 - 第9章 転封にみる領知引渡手続について―三つの郷村高帳に注目して―
 - 第10章 近世の文字社会と身分序列―秋田藩を事例に―
- 結語にかえて
索引

表示価格は税込

国文学研究資料館編

近世大名の

アーカイブズ資源研究

―松代藩・真田家をめぐって―

国文学研究資料館編

幕藩政アーカイブズの
総合的研究

真田家のアーカイブズを中心に、藩庁の全体構造や各部局の機能などについて、記録管理の観点から分析を試みたはじめての実践的な研究成果。

定価 七、七〇〇円

幕政・藩政文書それぞれの管理・伝来について具体的に検討し、幕藩文書管理の歴史に新たな知見を示す。

定価 九、三五〇円

国文学研究資料館編

アーカイブズの構造

認識と編成記述

（オンデマンド版）

川見典久著

古武器の探究

―一八世紀における刀剣申胄調査―

構造的な理解（構造認識とその表示（編成記述））について、実践的な議論を展開。

定価 八、八〇〇円

古武器を題材として、近世中期から後期にかけて起こった復古・好古の潮流を検証する古器物考証史の試み。

定価 九、九〇〇円

渡部圭一（筑波大学准教授）著

宮座と村落の歴史民俗学

—近世文書にみる村々の祭祀—

12月刊行予定

A5判上製・約五〇〇頁／
定価 九、三五〇円

中世以降、近畿地方を中心として各地に成立した宮座は、地域社会における祭祀・信仰の担い手として重要な役割を果たしてきた。その数はきわめて多く、一部の組織は形態を変えながらも今日まで継承されている。

本書は、近世の宮座を新出資料から検証するとともに、現存する宮座や祭祀組織の調査を通じて、その歴史と現在をつなぐ姿に迫る。また、近畿のみならず関東の事例をも視野に収め、「時代差」と「地域差」の両面から、日本社会における祭祀組織の展開を考察するための一つのモデルを提示することを目指す。

大戸安弘・八鍬友広編

定価 八、二五〇円

識字と学びの社会史(オンデマンド版)

—日本におけるリテラシーの諸相—

近代学校制度導入以前の、日本の識字と学びの歴史的展開と諸相を、様々な史料から多面的に掘り起こし、実証的な検討を試みる。

橋本道範著

定価 九、二四〇円

日本中世の環境と村落

中世村落にとつての漁撈の歴史的意義を問い、「生業の稠密化」論を提起し、従来の集約化論や集村化論を止揚する。

〔予定目次〕

序章 宮座研究の現在

I 祭祀組織研究における近世

第1章 「惣村宮座」概念の再検討

第2章 「株座」概念の再検討

付論1 「社当屋制」概念について

II 惣村宮座の近世的展開—近江国今堀村

第3章 相給村の村役人と長衆—「五百石

割」を例に

第4章 「年齢階梯」の変容と長衆—直物を例に

III 畿内近国の近世祭祀組織—大和国

第5章 「座祭」の成立と長老衆—大和郷

第6章 祭りの変貌と祭祀組織—葛城山

麓地域

付論2 大和の宮座と近江の宮座

付論3 大柳生の屋制と社主

IV 関東近世の村落祭祀組織

第7章 近世鎮守祭祀の成立—オビシヤ

文書から

第8章 山の祭りから里の祭りへ—常陸国

東城寺村

第9章 「十六人屋」の組織と座配—常陸

国田村

第10章 相給村の社事と由緒—武蔵国三

ヶ島村

終章 宮座研究の展望

前田勉著

定価 一〇、四五〇円

江戸教育思想史研究(オンデマンド版)

官学／私学、儒学／国学／蘭学といった枠組みを超え、17世紀から明治初期までを見通し、江戸教育思想史に新たな地平を拓く。

西山剛著

定価 九、九〇〇円

輿をかつぐ人びと—駕輿丁・力者輿昇の社会史

「輿昇」がいかなる身分であり、社会の全体構成のうち、いかなる位相に位置されるのか、さらにはその職能の実態や社会的機能について探る。

表示価格は税込

住友史料館編

住友史料叢書 39

年々記四

一六二〇年代から大坂で銅の精錬を業とし、一時世界銅産市場においても重要な位置を占めた住友家は、その後金融・貿易などをも手がけ、近代の財閥につながる豪商の典型である。その鉱業史料は、質・量ともにわが国屈指の基本史料であり、本叢書は一万数千点にのぼる近世史料のうち、重要で継続する記録類を中心に編纂、第一期く第六期、各期全六冊を刊行してきた。第七期からは近世史料とともに、近代財閥として多角的に成長を遂げる、近代史料のなかから重要な史料を選び、全六冊を刊行する。

12月刊行予定

A5判上製函入・約四〇〇頁／予価 二二、一〇〇円

張子康（長崎大学助教）著

琉球国の対外関係と仲介者たち〔30s〕

—十九世紀東アジア交渉史の現場から—

12月刊行予定

A5判上製約二八〇頁／定価八、二五〇円

〔予定目次〕

序章	琉球—中国関係
第一章	琉清関係における河口通事
第二章	逗留西洋人退去の請願運動と河口通事
第三章	動揺する琉清関係と久米村士
第四章	明清期中国における通事制度の変遷
第二章	琉球—薩摩関係
第四章	近世末期琉薩関係における間役
第五章	鹿児島琉球館とそのネットワーク
第三章	琉球—西洋関係
第六章	西洋諸国の接触と西洋語通事の登場
第七章	西洋語通事牧志朝忠
終章	

中国、日本、そして西洋諸国。激しく変動する十九世紀東アジアの国際社会で、琉球国はいかにして多様な相手と交渉を重ねていたのか。本書は、その舞台裏で活躍した通事・使節・書役ら「仲介者」に光を当て、琉球国の対外関係の実像に迫る。中国・日本・西洋諸国との多元的な関係を、交渉の現場から統一的に捉え直し、従来の制度・理念中心の琉球外交史に新たな視角を提示する。日・中・英・仏の多言語史料を駆使し、小国・琉球が変動する東アジア秩序に柔軟に対応した姿を鮮やかに描き、近世東アジア交渉史の新たな地平を切り拓く。

中川理（大阪公立大学大学院客員教授）・西川博美（岡山県立大学教授）著

武徳殿

―地方都市に成立した武道和風様式―

今冬刊行予定

A5判上製・約二八〇頁／定価七、七〇〇円

近代日本において武道の普及・統括を担った大日本武徳会。同会が海外植民地を含む全国に建設した演武場を「武徳殿」という。戦後の大日本武徳会の解散にともないその多くが失われたが、戦前には記録を確認できるだけでも約140棟が建設された。本書は、その成立過程と建築的特徴を残された資料から精査し、近代和風建築史のなかで見過ごされてきた武徳殿建築の独自性を明らかにする。さらに、民間団体による事業でありながら公共性を帯びた武徳殿建設の実態にも着目し、建築史のみならず、武道史、都市史、行政史、植民地研究に新たな視座を提示する。



群馬支部武徳殿（絵葉書）

〔予定目次〕

- 序章 大日本武徳会の成立と武徳殿
- 第一章 支部武徳殿の建設
演武場から武徳殿へ
表われた武徳殿形式とそれをもたらしたものの
支部武徳殿の完成形
- 第二章 支所・分会（市町村）へ広がる展開
支所・分会の設立と武徳殿建設
支所・分会武徳殿の波及
武徳殿建築の展開
- 第三章 昭和初期の再建・大規模化
大規模化する武徳殿
外地での建設―朝鮮と樺太
鉄筋コンクリート造様式
大規模化の方法とその意味
- 第四章 台湾における展開
台湾での大日本武徳会と武徳殿
本部設置後の建設加速と独自形式
- 結 章 武徳殿建設の終焉と残したものの
掲載武徳殿一覧表／索引

中川理著

定価二、四二〇円

京都 近代の記憶―場所・人・建築

「歴史都市」の近代化の過程で生まれたエピソードを、場所・人・建築をキーワードとして写真とともに綴る。

中川理・空想から計画へ編集委員会編

定価一四、三〇〇円

空想から計画へ

―近代都市に埋もれた夢の発掘―

最初の企てである「空想」が実際に都市空間に落とし込まれて、現実の「計画」となっていく過程にこそ、近代都市史研究の根幹をなすテーマが見出せるのではないか。編者の認識を「お題」に集められた25本の論考。

並木誠士編

定価二、一〇〇円

近代京都の美術工芸―制作・流通・鑑賞

明治・大正期の京都で制作・流通・鑑賞された絵画、工芸、建築、庭園、定期刊行物などの広範なジャンルをとりあげ、近代京都の美術工芸をめぐる状況の解明を試みる。

宮津大輔著

定価七、七〇〇円

京焼における芸術性と産業化

―小森忍から民藝、走泥社、そしてニューセラミックスへ―

京焼における芸術性（陶芸）と産業化（窯業）の拮抗・併存がもたらす製陶の新規性と発展を、複眼的に考察する。

表示価格は税込

萩原稔（大東文化大学教授）・武田知己（同前）編

忘れられた日中関係

「支那通」のみた近現代中国

今冬刊行予定

A5判上製、約四〇〇頁／
定価 九、九〇〇円

本書は、明治期から第二次世界大戦終結までの日本において、中国の専門家として活動した「支那通」たちの中国認識を多角的に検証するものである。外交官、軍人、ジャーナリスト、学者など多様な立場の彼ら「支那通」は、「中国専門家」という点を除いて、その属性や対中政策の方向性などについて共通の傾向があったわけではない。にもかかわらず、そこには中国に対する連帯意識や強い情熱といった心情的・感覚的なものが色濃くつきまとっていた。彼らの思想や活動を通して、近代日本の対中認識の形成過程を再検討するとともに、日中関係史および東アジア国際政治史を理解するための新たな視座を提示する。

松田利彦・陳延漢責任編集

植民地帝国日本と

グローバルな知の連環

—日本の朝鮮・台湾・満洲統治と欧米の知—

定価
一五、四〇〇円

宮川卓也著

帝国の気象学

—近代日本の気象観測網と

「日本気象学」の構想

近代日本気象学の始まりと発展、そして終焉と再出発を体系的に論じる初の学術書。

定価 七、一五〇円

【予定目次】

- 序（萩原 稔）
- 第一章 丁酉倫理会における中国論と「王道」論争—大連図書館長法貴慶次郎の言説を中心に（天木康充）
- 第二章 小田切万寿之助における「国際協調」論の形成—一九〇〇—一八年（久保田裕次）
- 第三章 中国専門雑誌の「支那通」—一九二〇年代前半の宇治田直義を中心に（萩原 稔）
- 第四章 一九二〇年前後の「支那」を「外交時報」はどう伝えたか（伊藤 隆信）
- 第五章 「支那通」外交官・須磨弥吉郎が追いつ求めた日中直接交渉—一九三一—三七年（金子貴經）
- 第六章 「支那通」ジャーナリスト・高木健夫の中国認識—『東亜新報』を中心に（神宮直史）
- 第七章 虐げられた人々への視線—村上知行の中国認識（戸塚麻子）
- 第八章 山田純三郎の日中関係観—一九三〇年代から一九五〇年代の時期を中心に（武井善和）
- 第九章 戦前・戦中・戦後の松村謙三の中国訪問—一九〇四—七〇年（武田知己）
- 結 「忘れられた日中関係」—おわりにかえて（武田知己）

新見まどか著

唐帝国の滅亡と

東部ユーラシア

—藩鎮体制の通史的的研究（オンデマンド版）—

定価
九、三五〇円

中田美絵著

もうひとつの唐朝

—仏教と中心化する「周縁」—

従来「周縁」に位置づけられてきた女性・宦官・外来人・仏教僧侶を中心に据え、唐代史の枠組みをパラダイム転換する試み。

定価 一一、〇〇〇円

表示価格は税込

高木博志 (京都大学名誉教授) 編

近現代日本の 宗教と文化

今秋刊行予定

A5判上製・約六〇〇頁／
定価 六、六〇〇円

『予定目次』
総論 (高木博志)

I 近代宗教と文化

第一章 教祖劇の誕生—九代目団十郎、川尻宝琴、そして宗教 (全智恵)

第二章 禁裏御車・童子と牛車の近代—賀茂祭と大喪をめぐって (村上紀夫)

第三章 明治期の東本願寺における美術品「下賜」について (國賀由美子)

第四章 創建神社の祭祀と文化—金沢・尾山神社における「開化」と「伝統」 (本康宏)

第五章 明治天皇東北巡行における音の奉祝空間—周縁に響いた讚美歌と雅楽系唱歌 (北原かな子)

第六章 杉孫七郎と宮中—明治維新と毛利家および祖先の顕彰を中心に (青藤紅葉)

第七章 キリスト者の地域開発事業にみる文化的意味 (中川 理)

第八章 蚕部綾部の宗教は文化か—都是と大本の神業をめぐって (菅江智洋)

II 大衆文化と宗教

第九章 郊外神社・長岡天満宮の近現代 (高木博志)

第十章 高山彦九郎像の建立と日蓮宗僧侶・明渡日正 (玉城玲子)

高木博志編

定価 六、六〇〇円

近代京都と文化—「伝統」の再構築

好評2刷

近代京都をめぐるさまざまな文化を研究対象に取り上げ、
既存の観光言説や「京都文化」論の相対化を試みる。

近代日本において宗教と文化はいかに交錯し、社会を形成していたのか。仏教、キリスト教、国家神道、教派神道、民俗信仰など多様な宗教の動向を、美術、工芸、音楽、文学、映画、芸能といった文化領域との関係から捉え直し、その相互作用の実態に迫る。士族による賛美歌受容、国家神道と教育儀礼、京都画壇と本願寺の関係など具体的な事例を通して描かれるのは、近代化の進展のなかで変容する信仰と文化の姿である。宗教史と文化史を架橋し、近代日本社会をより立体的に理解するための新たな視座を提示する。

第十一章 近代における京都染織業者の祀りと祭り—宮崎友禪影と染織祭を中心に (北野裕子)

第十二章 「帝国民藝」の創出—浅沼嘉実と戦時下の民藝運動 (福家崇洋)

第十三章 日本における教育・宣伝映画の歩みと宗教—明治・大正、日蓮宗を中心に (富田美恵)

第十四章 昭和天皇の外遊 (一九二二年) をめぐるイメージ・ポリティクス (紙屋裕子)

第十五章 水子霊の誕生—映画『人工流産の障害』 (一九五九年) の生政治 (末下千花)

III 宗教と社会

第十六章 信仰集団の生成と村落社会—金光大神の社殿建築をめぐる事蹟を中心に (見山真生)

第十七章 「陵墓」の近代—膨張・皇霊・夫妻 (今尾文昭)

第十八章 一徳会の一考察—ある教育勸語普及団体の軌跡、その一端 (谷川穂)

第十九章 京都の宗教的な遺物はなぜ「伝統文化」になったのか—「流転する伝統」の応用可能性 (菅沼明正)

第二十章 敗戦後関西学院の農事構想—兵庫県下・キリスト教系大学の選択 (田中智子)

第二十一章 身体化された教え—総力戦体制下における天理教の組織編制の論理 (福録一弘)

今尾文昭・高木博志編

定価 二、五三〇円

世界遺産と天皇家陵古墳を問う

天皇陵をめぐる諸問題を多角的に取りあげ、これからの天皇陵のあり方を考える。

表示価格は税込

佐藤賢一・梅田千尋・平岡隆二編

幕府天文方の研究



江戸幕府の一部局として誕生した「天文方」は、暦の作成をはじめ西洋天文学の受容や測量、さらには翻訳や外交にまでかわる多面的な性格をもつ存在だった。

本書は、その始まりである貞享改暦から幕府の終焉まで、約180年間にわたる天文方の歩みを、多分野の研究者による最新の知見で描き出す。和算・陰陽道・洋学など多岐に広がる学問領域を横断し、地域・組織・人物のネットワークを精緻にたどることで、これまで断片的にしか語られてこなかった天文方研究の空白を埋め、通史的な輪郭の描写を試みる。

好評2刷

A5判上製・五二二頁／定価八、二五〇円

鶴岡明美著

定価 一、〇〇〇円

実景を描く

—江戸後期風景描写をめぐる知の営み

実景を描いた作品群の背景にある権力関係を探り、近世の文化の諸領域を横断する知の営みを描き出す。

福島可奈子著

定価 九、〇〇〇円

混淆する戦前の映像文化

—幻燈・玩具映画・小型映画

戦前期日本で幻燈や玩具映画、齣フィルム、小型映画などの雑多なメディアが入り混じりながら技術的・産業的に発展・回帰・衰退していくさまを明らかにする。

鈴木友和著

定価 二、二〇〇円

薄明下の医学教育[Shibunkaku Works]

旧藩立医療施設関係者の足跡を丹念に追い、近代医学教育がいかにして成立したのかを提示することを試みる。

矢野貫一著

定価 三、〇〇〇円

小絵馬順礼—全二冊 夢之巻・幻之巻

[Shibunkaku Works]

国文学者・故矢野貫一氏が京都とその周辺、および台湾の社寺の小絵馬を取り上げるエッセイ集。

表示価格は税込

細川周平（国際日本文化研究センター名誉教授）著

音曲の近代百年 上・下巻

今秋刊行予定

A5判上製・各約四五〇頁／
定価 各 二、〇〇〇円

〔上巻〕

前 弾
名 集

第1章 音曲—お座敷、劇場、家庭

一段目 上野体制の支流

第2章 邦楽調査掛—音曲の保存、鑑賞、古典化

第3章 東京音楽学校邦楽科—洋楽の殿堂の片隅で

二段目 国の楽、国の歌

第4章 国楽—建設すべき国と楽

第5章 「君が代」—国の賀歌百態

〔下巻〕

三段目 メディア—聴衆を創る

第6章 楽譜—一人の稽古、数人の合奏、無数の記譜法

第7章 レコード—複製技術時代の芸事

第8章 ラジオ—電波と伝統

四段目 和洋の界面—調和と衝突

第9章 ウェスタール論争—日本音楽の発見者、その対話とすれ違い

第10章 和洋調和楽—音曲、洋楽器と出会う

後 弾

黒船来航から終戦までの約百年、伝来の楽は西洋音楽の衝撃にさらされながら、静かに、しかししたたかに生き延びてきた。本書は「音楽」ではなく、あえて忘れられた言葉「音曲」を掲げ、町人の歌、糸竹の芸、在来の響きが近代国家や国民意識とどう交錯したのかを描き直す。洋高邦低の通史を離れ、現地から近代を聴き返す試み。

杉山卓史著

定価 八、二五〇円

「われ感ず、ゆえにわれ在り」の美学

—ドイツ啓蒙主義における「感情」と「感覚」の系譜

「感性の学」として構想された美学の原点に立ち返り、「感情／感覚（Gefühl）」と「感覚（Empfindung）」という二つの概念に光を当てる。

宗像衣子著

定価 五、九四〇円

響きあう東西文化

—マラルメの光芒、フエノロサの反影

東西の芸術文化の交流の諸相および日本文化の価値を、現代に向けて照らし出す一書。

永井聡子著

定価 五、〇六〇円

劇場の近代化

—帝国劇場・築地小劇場・東京宝塚劇場「オンデマンド版」

帝国劇場・築地小劇場・東京宝塚劇場を取り上げ、西洋の劇場近代化過程とも比較しながら日本の劇場の近代化の特色を描きだす。

森田都紀著

定価 八、八〇〇円

能管の演奏技法と伝承

唱歌譜の解説と、近現代の演奏技法の分析を通して、能管を中心とする能楽の演出の形成過程を歴史的に解明しようと試みる。



表示価格は税込

万博学研究会編

万博学／Expo-logy 第5号

特集 万博の内側から

12月刊行予定

A5判並製・約二〇〇頁／
予価二、七五〇円

2025年大阪・関西万博は、大盛況のうちに幕を閉じた。では万国博覧会という巨大催事は、誰が、どのように作っているのだろうか。過去の万博を振り返ってみても、著名プロデューサーの回顧録を除けば、この問いに答える資料はわずかである。今号では、博覧会協会、テーマ事業ディレクター、展示プランナーという立場で大阪・関西万博の内側で活躍した当研究会メンバーが、いかに万博を作ったのかを自身の経験から語る。また国連の事務次長補・陳列区域代表を担ったマーヘル・ナセル氏の特別寄稿を掲載。小特集では、万博で実施された途上国支援プログラムをテーマとした、シンポジウムの成果を収録する。

佐野真由子編

定価九、三五〇円

万博学―万国博覧会という、世界を把握する方法

好評2刷

万国博覧会のさまざまな側面に着眼し、掘り下げたその先に、人類世界の歩みを浮き彫りにする。

寺本敬子著

定価七、一五〇円

パリ万国博覧会とジャポニスムの誕生

好評5刷

開催国フランス、参加国日本、パリの観衆、三者の相互作用を通じてジャポニスムの誕生を解き明かす。

〔予定目次〕

〔特集 万博の内側から〕

万博を「創る」側に立ってみて

（岩田 泰）

EXPO2025との一〇年

（澤田裕二）

未来の覧会屋へ―誰も見たことのない未来を、展示に。

（岸田匡平）

〔特別寄稿〕国連と万博と私（マーヘル・ナセル）

〔小特集 万博と国際援助―現状・論点・展望〕

二〇二五年大阪・関西万博での経験をふりかえって―万博は平等な世界を描けるか？ ジヤマイカパビリオンが示すもの

（モリー・スミ）

万博と国際援助―支援と介入の境界

（五月女賢司）

大阪・関西万博における途上国支援プログラムとその実務

（正橋広）

JICAによる万博支援

（徳橋和彦）

パプアニューギニアの展示と国際交流―南太平洋協会を中心に

（中牧弘光）

二〇二七年ベオグラード万博へ―開発途上国とともに
（アレクサンドラ・コバチ）

共同館の歩みのなかに、2025大阪・関西万博の試みを位置づける

―「共創の場」としてのCOMMONS（共同）の挑戦
（吉田憲司）

〔万博学の最前線〕

石油外交と一九七〇年大阪万博

―石坂泰三とアラビア石油の役割に着目して
（川島光孝）

山高信雄再考―博覧会を視点にして万国博覧会参加報告書の史料学的考察

―『米国博覧会報告書』を対象として
（関根 仁）

〔既刊案内〕（電子版有）

創刊号 〔特集〕植民地なき世界の万博

第2号 〔特集〕万博と冷静 定価二、二〇〇円

第3号 〔特集〕大阪万博前後の世界 定価二、二〇〇円

第4号 〔特集〕万博で考える二〇二五年大阪・関西万博 定価二、七五〇円

定価二、七五〇円

西野嘉章（東京大学名誉教授）著

ヤヌス學大全

—類型的思考の精神史

今秋刊行予定 A5判上製 約四〇〇頁／予価 未定

古代ヘレニズム世界以来、人々は異形の像になにを仮託してきたのか。時間軸では古代〜現代まで、地理的にはアジア・ヨーロッパ・オセアニア・アフリカ・南米など世界各地で、双面・三面・多頭・多重体を持つさまざまな異形像が制作された。古代の呪術的彫刻から中近世の宗教美術、貨幣、錬金術書等、そして近現代のシャガールやウオーホルら前衛美術、映画や雑誌・広告

堅田智子著

定価 一〇、四五〇円

アレクサンダー・フォン・シーボルトと 明治日本の広報外交

「日本帝国近代史の化身」と評されたドイツ人外交官アレクサンダーの人生と業績。そして明治日本にもたらされた広報外交の裏面史を解き明かす。

西野嘉章著

定価 八、八〇〇円

洋学誌—解剖・言語・博物

江戸後期から明治初頭までの「洋学」の歩みを、東西の史資料に拠りつつ、解剖学、辞典学、博物学の三方から照射する。

【予定目次】

- 第一章 前史 古代ヘレニズム世界
- 第二章 誕生 古代ローマ世界から中世キリスト教世界へ
- 第三章 転生 ロマネスク世界からゴシック世界へ
- 第四章 変貌 中世末期のキリスト教世界
- 第五章 寓意 ルネサンス人文主義の古代神話世界
- 第六章 驚異 宗教改革期の歪形世界
- 第七章 回帰 近世から現代へ
- 結語

といったマスメディアまで……。目につくすべての「ヤヌス」属を分類し、その図像的変遷を追う。そして、時代に応じてヤヌスの果たした宗教的・哲学的・宇宙論的な象徴としての機能を読み解きながら、これらがいかんにして人間の知的体系に組み込まれてきたかを示す、図像学・文化史研究の集大成。

ジラルデッリ青木美由紀編著

定価 七、一五〇円

オスマン帝国と日本趣味 —ジャポニスム

日本趣味の美術工芸品を現地調査した成果をもとに、ヨーロッパ周辺に及んだもうひとつのジャポニスムの諸相を明らかにする。

松本和也著

定価 七、七〇〇円

印象派の超克

—近代日本における西洋美術受容の言説史

西洋美術の新潮流が日本にもたらした文化的衝突、それがしだいに「日本化」され超克されていくさまを明らかにする。

『仏教美術と信仰の文化史学』編集委員会 編 井上一稔 監修

仏教美術と信仰の文化史学

10月刊行

A5判上製・七五二頁／定価 一六、五〇〇円

仏教美術とは、単なる造形表現ではなく、人々の祈りや思想、社会のあり方を映し出す文化の結晶である。文化を人間のあらゆる活動の総体として捉える「文化史学」の視点から、本書は仏教をめぐる多様な人間の営みを読み解く。彫刻・絵画・工芸などの美術史分野に加え、歴史学、考古学など幅広い領域の研究者が集い、仏教美術と信仰を対象とする研究の最前線を示す。既存の学問分野の枠を越えて、造形や信仰の背後にある精神活動や歴史的背景を立体的に浮かび上がらせることで、仏教が生み出した「かたち」と「こころ」に迫り、文化史学の豊かな可能性を展望する。

【目次】

井上 一稔 「はじめに―石田文化史への断想―」

竹居 明男 「文化史（学）の歩み」

小林和華子 「静岡・谷津区南禅寺伝来諸像のうち十二面観音像の制作背景と造像主体」

佐々木 進 「藤原道長の下品下生往生考」

寺前 公基 「法成寺創建再考―阿弥陀堂から金堂へ―」

小牧 拓矢 「興福寺北円堂羅漢像の尊名変遷について―平安期再興像を中心とした再検討―」

三好 崇弘 「興福寺北円堂再興の背景と雅縁の関与について」

杉崎 貴英 「富山県「立山博物館」帝釈天立像再説―寛喜二年銘を有する鍔銅像の性格をめぐる―」

森山 郁真 「鉄舟禪寺所蔵木造文殊菩薩坐像の伝来について―像内納入品・修理銘文・後補光背の検討から―」

新見 康子 「東寺美相寺と勝源地蔵」

國賀由美子 「大谷大学博物館蔵「日吉山王利生記絵巻」について」

山下 絵美 「仏師・吉野右京の事蹟と動向―龍安寺・木造特芳禅傑坐像と木造細川勝元坐像の考察から―」

川嶋美貴子 「大福山本恵寺の開帳について―「安永三年三月観音開帳諸事覚帳」の紹介とともに―」

國生 知子 「高良山の仏教美術―筑後国一の宮の神仏習合と神仏分離―」

第二部 相關の文化史

田中 健一 「京田辺市甘南備寺木造業師如来坐像と平安京天

松原 瑞枝 「熊野三所大神社三神像・補陀洛山寺千手観音立

像について―二世紀熊野信仰成立期における那智山の諸相―

高梨 純次 「甲賀市・圓福寺の文応二年在銘像と村落 申賀の中世社会と造像を俯瞰する」

中安 真理 「天野社の「舍利講式」と高野山の舍利信仰―守覚法親王「舍利講式」の受容と展開―」

鶴柄 俊夫 「敬満寺遺跡と史跡百濟寺境内―寺院とその遺跡から読み解く湖東の中世―」

浅利 尚民 「池田光政の肖像と池田継政の夢」

第三部 解釈の文化史

井上 敦子 「業師寺金堂業師如来像台座小考―四神を中心にして―」

森井 友之 「仁和寺阿弥陀三尊高脇侍像の配置と像容について」

高口 柚 「調伏を担う異形の毘沙門天像の変遷―一面十臂の毘沙門天像を中心に―」

趙 玉萍 「日本における水月観音の受容―密教事相書の記述を中心に―」

浅渚 毅 「鎌倉時代の仏師「定慶」についての一考察―川野 憲一「仏涅槃図の語るところ―有馬・念佛寺蔵絹本著色仏涅槃図を中心に―」

堀川亜由美 「法起菩薩曼荼羅図にみる金剛山の法起菩薩信仰について」

清水 真澄 「弥勒下生信仰に関わる観音菩薩について―弥勒懺法における役割―」

工藤裕司 「泉州開元寺東塔須弥座西北面六図について―宋代阿育王塔信仰の一例として―」

あとがき／執筆者紹介

木下京子編

杉戸絵の研究

4月刊行

A4判上製・四一八頁／
定価 二二,〇〇〇円



近世の城郭御殿や神社仏閣において、杉戸は権力空間や宗教空間を荘厳する不可欠な建具であった。「廃城令」以後、解体された御殿の模や杉戸、欄間などの建築部材は海外へと流出し、売立てられた。アメリカの美術館に収蔵されている杉戸の中に、菱紋が刻まれた引手を持つものが複数存在し、徳川の時代の記憶を今もなお静かに伝えている。一方、日本国内に現存する杉戸は保存と評価の難しさから、杉戸絵が障壁画研究において副次的に取り上げられることはあっても、研究対象の主体として扱われることはほとんどなかった。

本書は、城郭御殿を代表する名古屋城と二条城の杉戸をはじめ、徳川家ゆかりの寺院や霊廟に伝来する杉戸、明治宮殿の杉戸、さらには在米美術館所蔵の杉戸にまで視野を広げ、国内外に分散する杉戸の実態を総合的に分析する。豊富なカラー図版と研究者7名による論文とコラムを通じて、これまで周縁化されてきた杉戸絵研究の発展を目指すものである。

はじめに

【図版篇】

鶴林寺本堂の杉戸絵／西教寺客殿の杉戸絵／名古屋城本丸御殿の杉戸絵（名古屋城総事務所蔵）／伝名古屋城二之丸御殿の杉戸絵（現衛立義、個人蔵）／相応寺の杉戸絵（相応寺蔵、岡崎蔵）／建中寺の杉戸絵（名古屋城竹長押茶屋の杉戸絵、名古屋城二之丸御殿校之間の杉戸絵、個人蔵）／伝西沢御殿の杉戸絵（名古屋博物館蔵、通照院蔵）／名古屋離宮の杉戸絵（名古屋城総事務所蔵）／二条城二之丸御殿の杉戸絵（京都府元離宮二条城事務所蔵）／養源院本堂の杉戸絵／喜多院客殿の杉戸絵（日光東照宮の杉戸絵／（参考）「日光山御宮之図」部分（大阪城天守閣蔵）／輪王寺大猷院の羽目板絵／紀州御殿の杉戸絵（大阪城天守閣蔵）／和歌山城の杉戸絵（和歌山城整備企画課蔵）／イザベラ・ガードナー美術館蔵の杉戸絵／ボストン美術館蔵の杉戸絵／フィラデルフィア美術館蔵の杉戸絵／（参考）東京国立博物館蔵「江戸城障壁画下絵」

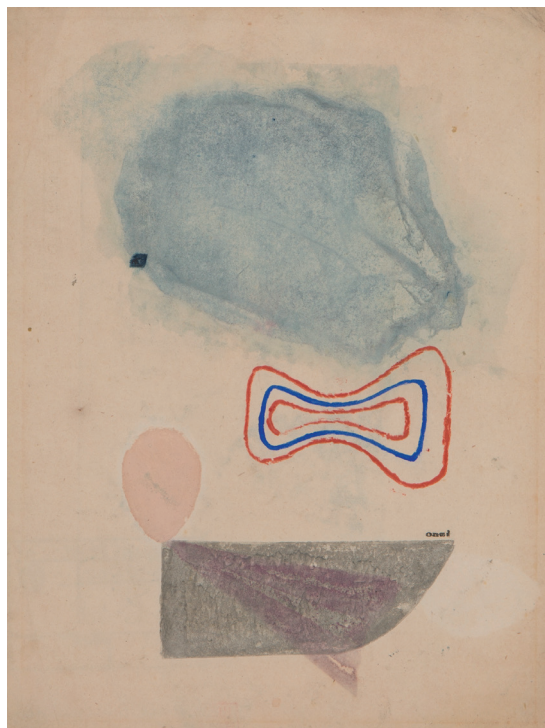
【論文篇】

木下京子「序論 杉戸と杉戸絵の成立とその展開」
「コラム」久保留康「近世の飾り金具」
朝日美砂子「名古屋城下の杉戸絵」
「コラム」朝日美砂子「名古屋城の杉戸絵―指定と保存・修理と現場―」
「コラム」朝日美砂子「旧国主 名古屋離宮の杉戸―引手を手掛りに―」
松本直子「二条城二之丸御殿杉戸絵について―徳川幕府の城郭御殿杉戸絵との比較から―」
「コラム」松本直子「二条城二之丸御殿杉戸絵の修理と模写について」
「コラム」松本直子「二条城本丸御殿（旧桂宮御殿）の杉戸絵」
奥平俊六「宗達と板絵の画家―養源院の杉戸絵はどのように描かれたのか―」
「コラム」奥平俊六「喜多院障壁画と土佐一得」
山澤孝「江戸狩野派杉戸絵と徳川將軍家霊廟拝殿の荘厳」
五十嵐公一「明治宮殿杉戸絵―『皇居御造営誌』『皇居造営録』から分かること―」
木下京子「アメリカに流出した城郭御殿と寺院の杉戸」
「コラム」ベギー・オリ・ケイト・ダフィー、木下京子「フィラデルフィア美術館所蔵杉戸の杉板について」
謝辞／あとがき／執筆者略歴／収録杉戸絵一覧／英文目次／要旨

表示価格は税込

思文閣グループの
逸品紹介

美の縁び よすが



アレゴリー コロンブスの卵

恩地孝四郎

本作は、日本における創作版画あるいは抽象絵画の先駆者として知られる恩地孝四郎（おんち・こうしろう、1891～1955）の「アレゴリー コロンブスの卵」と題される作品です。

恩地は、東京美術学校に入学して洋画、彫刻を学び、詩や版画、装幀など多方面に活躍しました。特に戦後は、のちにマルチブロックと呼ばれる手法で独創的な作品を制作しました。マルチブロックとは、ベニヤ板や紐、布、落葉、貝殻などを即興的に自由に組み合わせて紙に刻印する、いわば版を彫らない版画です。

恩地はこの独自の手法を用いて、「フォルム」や「リリック」、そして本作を含む「アレゴリー」といった代表的な抽象版画のシリーズを生み出しました。

カンディンスキーらドイツ表現主義の抽象版画に強い影響を受けたとされる彼の作品は、版を重ねる木版画という制作手法の特性上、極めて構成的であると同時に、豊かな音楽性や抒情性を感じさせます。そこには、戦時下での閉塞感や不自由な創作活動からの解放感とともに、新しい時代への期待感があらわれているかのようです。

思文閣大入札会 LINE 公式アカウント



大入札会に関わる情報発信のほか、
作品コンディション等をお問合せいただく
窓口としてご活用ください。

SHIBUNKAKU
思文閣

思文閣古書資料目録

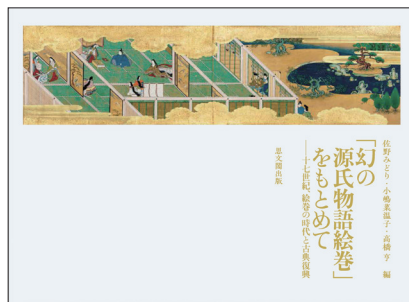


源氏物語 全五十四帖

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・
錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り扱っており
ます(年3回程度発行)。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問
い合わせ下さい。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355
TEL (075) 752-0005 FAX (075) 525-7155
<https://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>
kosho@shibunkaku.co.jp



佐野みどり・小嶋菜温子・高橋亨編

「幻の源氏物語絵巻」をもとめて

—十七世紀、絵巻の時代と古典復興

A4判横綴じ函入・五〇四頁／定価 三八、五〇〇円

「源氏絵」の歴史のなかでも際立つ個性を有している
「幻の源氏物語絵巻」。この豪華絵巻の謎に、豊富な
カラー図版と国文学研究者・日本美術研究者15名の
論文でもって迫る。

自費出版のご案内

思文閣出版の自費出版レーベル

「Shibunkaku Works」

思文閣出版が培った学術書制作のノウハウを
活かして、ご研究の書籍化をお手伝いいたします。
詳細は小社までお問い合わせください。



京都市東山区古門前通大和大路東入元町355
TEL (075) 533-6860 FAX (075) 531-0009
<https://www.shibunkaku.co.jp/publishing/>
pub@shibunkaku.co.jp